

## 徳川日本・ロシア・アイヌ交流史と本多利明の開発経済論（2） —天明6年（1786）成立最上徳内書簡『乍恐以書付奉申上候』 における取材記を中心として—

宮 田 純\*

はじめに

第1章 天明6年（1786）における日・ロ会談前史

第2章 5月5日～8日における最上徳内とロシア人の会談内容について

おわりに

### はじめに

徳川時代後期の算学者として知られる本多利明〈寛保3年（1743）－文政3年（1821）〉<sup>1</sup>に向けて、門弟の最上徳内<sup>2</sup>からもたらされた書簡『乍恐以書付奉申上候』<sup>3</sup>という資料がある。同資料は、幕府による公の蝦夷地調査時<sup>4</sup>である天明6年（1786）5月8日～13日の間に成立した<sup>5</sup>と推定される取材録として認めることができ、同調査に竿取りとして参加した最上徳内がクナシリ島やエトロフ島にて体験、あるいは入手した風聞を現地においてまとめたものである。さらに詳述すれば、その内容構成はエトロフ島に滞在中のロシア人についての調査録の色彩をおびており、天明6年

---

\* 中央大学経済研究所客員研究員

1 本多利明は近世後期の算学者であるが、日本国の豊饒化を目した経済政策論を提起した人物としても知られる。「鎖国」下の時代環境において、対外交易を推進した主張などに独自性がみられ、その内容は、『経世秘策』（1798年成立）や『西域物語』（同年成立）に収められている。なお、本多利明の没年月日は文政3年12月22日であるが、それを西暦に換算すると1821年1月25日に該当する。したがって、没年を1821年と表記した。最新の本多利明研究としては、拙著『近世日本の開発経済論と国際化構想—本多利明の経済政策思想—』（御茶の水書房、2016年）がある。

2 最上徳内（1755－1836）の略歴は以下に整理される。出羽出身の探検家・算学者・儒者。天明1年（1781）に江戸の本多利明の私塾に学び、その後、同5年（1785）以降の幕府の蝦夷地調査に携わり、クナシリ島・エトロフ島へ単身で渡った。田沼失脚の余波を受けて失職したのち、寛政年間には再び幕府の蝦夷地政策に関わるなど幕吏として重宝された。北海道や千島列島での調査を通じてロシア事情や現地アイヌの事情などを幅広く収集し、それが様々な経路により多くの人々に伝わることとなった。主な著作に『蝦夷草紙』、『蝦夷国風俗人情之沙汰』、『度量衡説統』、『論語彙訓』などがあり、シーボルト（1796－1866）とともにアイヌ語の辞典編さんも行っている。最上徳内の生涯を整理した成果として、皆川新作『北邊の先覚者 最上徳内』（電通出版部、1943年）、島谷良吉『最上徳内』（吉川弘文館、1977年）を列記しておく。

3 国立公文書館蔵『巡周蝦夷秘談』（請求番号：178-0253）に所収。

(1786) 5月における、(1) ロシア人との対面以前の動向、(2) 同年5月5日から8日の間における彼らとの対談録、(3) それ以後の備忘録、といった時系列としての記載となっている点が特徴的である。なお、その宛先は、調査隊の上司である普請役の山口鉄五郎であり、その写しが師匠である本多利明にもたらされた形跡がある点を再度強調しておくべきであろう<sup>6</sup>。

こうした経緯から、この時期の北方事情に関する情報が同資料を経由して、換言するならば、ブラットホームとしての最上徳内を通じて利明にインプットされ、さらには、その後の寛政年間に成立を見ることとなる本多利明の経済政策論説の内容へと反映している可能性を仮説として提起するが、それを証する整理として、『乍恐以書付奉申上候』の内容を事細かに分析する必要がある。その場合に、筆者は(1)について分析を行っているところから<sup>7</sup>、残された課題として(2)・(3)についての検討を進めなければならない。したがって、『乍恐以書付奉申上候』に記されるところの、天明6年(1786)5月5日～8日の最上徳内とロシア人の会談内容、その後の展開を内包した備忘録の部分の検討ならびにその内容の史的価値の指摘を本稿のテーマとする。

## 第1章 天明6年(1786)における日・ロ会談前史

天明6年(1786)5月5日～8日の4日間は、日本人とロシア人の交流がエトロフ島にて確認される歴史的な数日間であるが、その取材内容に該当する(2)、さらには(3)の分析を進めるに先立って、それ以前の動向を最上徳内と幕府の調査隊の関係下に整理しておきたい。

天明5年(1785)、普請役佐藤玄六郎・皆川沖右衛門・山口鉄五郎・青嶋俊蔵・庵原弥六の5名を首班とする蝦夷地調査隊が組織され、最上徳内は青嶋の竿取として帯同することとなった。同年2月中に江戸を出立した調査隊一行は3月半ばに松前に到着し、最上徳内が所属する山口・青嶋からなる東蝦夷地調査班は4月29日に松前を出立、アツケシを経由して8月中にクナシリ島へと渡り、同島の東北端であるアトイヤ岬にまで到達する。ただし、風波のため前進を断念し、再び松前へと帰還して越冬することとなる。

翌天明6年(1786)には再度の北行が実施され、徳内は山口・青嶋一行よりも先となる1月20日に先渡として単身で松前を出立してクナシリ島へと渡り、4月18日にアイヌ従者フリウエンを帯同して同島のアトイヤを出立し、5月はじめにエトロフ島に着岸する<sup>8</sup>。『乍恐以書付奉申上候』の冒

4 天明5年(1785)以降の幕府の蝦夷地調査は、松前藩による委任統治が認められていた北海道や、詳細が不明瞭な地域とみなされていた千島列島におけるロシア南進事情、あるいは、現地アイヌの動向、さらには、松前藩の動向を分析するために実施されたものであり、のちの幕府直轄による北海道エリアの支配へと展開する初発段階の国家的プロジェクトとして理解しうる。

5 成立年月日についての分析は、『乍恐以書付奉申上候』(『国立公文書館蔵『巡周蝦夷秘談』所収)による。

6 本多利明と最上徳内の共著に該当する、天明8年(1788)1月に成立した『別本赤蝦夷風説考』(国立公文書館蔵(請求番号:185-0289))の内容は、『乍恐以書付奉申上候』に依拠していることを補足しておく。

7 幕府の蝦夷地調査開始の経緯から、それと最上徳内の関係、さらに、天明6年(1786)5月5日以前の動向を北方史の展開において分析したものである(拙稿「徳川日本・ロシア・アイヌ交流史と本多利明の開発経済論(1)―天明6年(1786)成立最上徳内書簡『乍恐以書付奉申上候』冒頭部を中心として―」『AJ Journal』第13号(2018年)参照)。

頭部には、その後、同島のシラルル、ナイホ、シヤナ、ナイホ（筆者注—前記とは別場所）の順で北上し、ロシア人のモシリハ滞在情報や、彼らがアイヌの保護下にあること、さらには、ロシア人の滞在理由は仲間同士の内紛にあり、その結果として置き去りにされたこと、彼らの南進の目的は日本側との交易にあったことなどの風聞をそれぞれ入手したことが記されている。

こうした探訪記を念頭に置きながら、徳内は「依之拙者存付之趣、左に申上候」<sup>9</sup>と、天明5年（1785）のクナシリ島滞在時に入手していた次なる情報を書き添えている。それは、

くなしりに罷在候節、夷人共評儀仕を何成評儀哉と相尋候処、（中略）うるつふ嶋に赤人流船  
 壱艘着仕候処、船中無人候。死人壱人有之、破損も不相見、積入荷物も余程有之。諸道具取隠  
 し、船を焼捨候得共、夷人は頼母子からすものと、大きにさみし。少々事有之候而も大に立腹  
 いたし、其中にも赤人遠国方参り候者は左程にも無之、近国方参り候赤人は、万事不法之振舞  
 仕候。依之当年うるつふ之渡海難成候由申候<sup>10</sup>

という記載であり、同島でなにやら協議中のアイヌたちにその内容を問うたところ、ウルップ島において荷物などを積載したロシアの無人船を発見したので、荷物を没収して船を焼却したところ、ウルップ島に滞在中の本国出身ではなく「近国」出身のロシア人たちは、それをアイヌの蛮行としてとらえ、それ以来アイヌとロシア人の関係が不穏であり、それを前提としてロシア人のアイヌへの「不法之振舞」が増長し、アイヌとしてもウルップ島への渡海を躊躇する状況が発生しているとの取材が記されている。この理解を回顧しながら、徳内は

然は、今度赤人欠落仕候程に而、夷人家さかしに参り候坎も不相知、又は右体に偽り、此方之  
 地方様子等を見探り、段々此末はえとろふ、くなしりとも渡海致す存念難斗、猶又、渡海不致  
 様に伝言参り候も、実説に難取<sup>11</sup>

と私見を記しており、アイヌとロシア人の関係が悪化している特殊な状況を背景として、内紛によ

8 幕府の蝦夷地調査隊の動向の整理については、現在の研究水準に相当する秋月俊幸研究〈同「千島列島の領有と経営」『岩波講座 近代日本と植民地 1 植民地帝国日本』（岩波書店、1992年）・同「千島列島をめぐる日本とロシア」（北海道大学出版会、2014年）〉ならびに、コラー・スサンネ研究〈同「安永年間のロシア人蝦夷地渡来の歴史的背景」『スラヴ研究』第51号（北海道大学スラヴ研究センター、2004年）・同「天明年間の幕府による千島探検」『北海道・東北史研究』第2号（北海道・東北史研究会、2005年）〉をおおいに参考とした。

9 『乍恐以書付奉申上候』（国立公文書館蔵『巡周蝦夷秘談』所収）。なお、同資料は『本多利明宛最上徳内書簡』山下恒夫編『江戸漂流記総集別巻 大黒屋光太夫史料集第一巻』（日本評論社、2003年）として翻刻化されている。したがって、研究の更なる進展のために、同資料集の該当箇所を〈『史料集』、～頁〉と略記する。原資料との正誤確認を経たことから、適宜に修正を施してある。

10 『史料集』、520頁。

11 『史料集』、520頁。

り離脱したロシア人たちがエトロフ島にやってきたのは、単純に帰国の手段を求めてアイヌを頼ってきたのかもしれないし、あるいは、日本の調査を目的としてエトロフ島、クナシリ島と順次の南進を意図していたのかもしれないが、正確なところは不明であり、しかも、ウルップ島への帰還に抵抗を示す伝言があるらしいがそれも信憑性にかける、と述べている。

この見通しとともに、離脱したロシア人たちについて把握した内容も、

赤人主従三人之内壱人、諸人之頭に相立候者、壱人は其次、壱人は水夫に候得共、平生之船頭には無之、余程気丈夫成る者に而、此方見探りに参り候者なれば、頼に幸<sup>12</sup>

と記されており、エトロフ島滞在中のロシア人はリーダー格1名、それに準ずる者1名、水夫1名による合計3名であり、日本の調査を志向するほどの者だろうから、対面時におおいに「頼」となるとの推定を示している。それを踏まえながらの徳内の行動は、

此度、御国境見分御用之要を補ひ候如く、取様之為にも相成候もの、欠落者に候得共、御国内之嶋々見届の手綱にも相成候者にて、御仁術之御用に付、時節到来得たるもの共と存、大に心急ぎ、風厳敷候而も致出帆、もしりはしゆると申所に、五月五日着仕候<sup>13</sup>

と記されるように加速され、5月5日にモシリハの「しゆる」、いわゆるシュルシャムに到達することとなるのである。この引用にて、注目すべきは、「御国境見分御用之要」とあるように、徳内の重要任務の一つが将来的な国境画定化に資する情報探索であったことであり、幕府による意向を含んだこの目的に達するために、正確な情報入手への手がかりを意味するだろう「見届の手綱」と位置づけた3人のロシア人との対面が不可欠な条件として語られ、前年、すなわち天明5年(1785)段階の北行時からすでに彼らの動向を意識していたことが明らかとなるのである。

## 第2章 5月5日～8日における最上徳内とロシア人の会談内容について

以上の経緯を経ながら、三人のロシア人(筆者注―後述のイジユヨ、サスノスコイ、ニケタ)との4日間に及ぶ会談が実施されることとなるのであるが、後日談も含めて、①5月5日の記事内容、②5月6日の記事内容、③5月7日の記事内容、④5月8日の記事内容、⑤会談終了後の展開、といった段階的な分析が適切である。本章ではこの整理に基づきながら論旨を進めてゆきたい。

### 第1節 5月5日の記載内容

「もしりはしゆると申所に、五月五日着仕候」<sup>14</sup>とエトロフ島モシリハのシュルシャムに到着した

12 『史料集』、520頁。

13 『史料集』、520～521頁。

14 『史料集』、521頁。

最上徳内の5日の記録は、

しゆるしやむは、まうてかあいの住所と、当嶋中長夷に御座候。砂浜に船を着候得は、赤人三人出迎、礼を致し、ほうしや頭巾をかぶり、杖を持、雪沓を履て立居候。拙者、いことい共に砂原に筈を敷居候処、いこといは去年方入魂之事故、傍に参り、頭巾を取礼致、次に拙者方へ黙礼を致候間、私も黙礼仕候。夫方飯振廻致し被下かしと申し候間、赤人并当所長夷、飯振廻仕候。赤人通辞之夷人相尋候処、遠方に罷越候に付、急迎に可遣旨申付候<sup>15</sup>

という記載から始まる。文面から、シュルシャムに居住するモシリハ乙名マウテカアイノならびに、アツケシ乙名イコトイといったアイヌの立ち合いのもとで3人のロシア人との初対面が到着場所の砂浜で行われ、徳川日本・ロシア・アイヌが融合する状況下に日・ロ交流が「黙礼」からスタートしたことがわかる。この描写において留意すべきは、ロシア人たちは徳内の到着を出迎えていたことが一つとしてあり、彼らが徳内との交流を切に望み続けていたことを証している。いま一つとしては、相互の意思の疎通に不可欠な通訳に該当する「赤人通辞之夷人」が不在であり、正確な情報を伝達しあうことを困難とする状況から交流が開始されたことを強調しておくべきである。この3人のロシア人の名は

赤人名 イシユヨ サスノスコイ ユケタ<sup>16</sup>

と記されているが、その詳細は秋月俊幸氏によれば、彼らはイルクーツク出身のシメン・トロヘイジユ・イジユヨ (Simeon Dorofeevich Iziurov ?)、オホーツク港出身のイワン・エレカウイシュ・サスノスコイ (Ivan Eliseevich Sosnovskii ?)、ネルチンスク出身のニケタ (Nikita) であり、ポロンスキーの『千島誌』から判断すれば、ヤクーツクの大商人レベジョフ=ラストチキン (?-?) が安永9年(1780)6月地震の大津波でウルップ島の陸上に打ち上げられていた「ナターリア」号の引き下ろしのために、天明4年(1784)年に派遣した「パーヴェル号」の乗組員たちとの見解が寄せられている<sup>17</sup>。この指摘に、「ナターリア」号は安永7~9年(1778~80)にかけてウルップ島やアツケシに渡来したシャバーリン率いるラストチキン商会の船である<sup>18</sup>ことを加味すれば、3人はラストチキン商会の配下のものではあったと推定される。

15 『史料集』、521頁。

16 『史料集』、521頁。

17 前掲秋月(2014)、94頁。なお、ロシアのАссоциация японоведов (Association of Japanologists (日本研究者協会))を通じた2016年8月10日付けの公開情報として、В.В. Щепкин氏によるПервая японская правительственная экспедиция в земли айнов (1785-1786 гг.) があり、その中で、イジユヨはСемен Дорофеевич Извозов、サスノスコイはИван Сосновский、ニケタはНикита、という表記として紹介されている。(<[http://japanstudies.ru/index.php?option=com\\_content&task=view&id=847&Itemid=70](http://japanstudies.ru/index.php?option=com_content&task=view&id=847&Itemid=70) (2017年8月29日確認)>)。



## 第2節 5月6日の記事内容

挨拶や簡単な自己紹介に終始した前日5日の初対面に続く翌6日は、

翌六日朝、飯振廻仕候。少々蝦夷云申に付、仕方半分に應對仕候。赤人の趣。一 当冬中、飯糧にかつれ、大に難渋仕候。一 うるつふ方帰国仕候事、不能候<sup>19</sup>

と記しているようにロシア人の話すアイヌ語を交えながらの取材となり、食糧難やウルップ島方面への帰還が困難である状況を聞いたうえで、

同所（筆者注—ウルップ島）方、やんけちりほい（ヤンゲチリポイ島）を見渡し、れふんちりほい（レブンチリポイ島）に渡り、夫方まかんる（マカンル島）見渡し、しもしり（シムシル島）に渡り、夫よりけとる（ケトイ島）、うせしり、（ウシシル島）、らしやう（ラショウ島）三嶋を見渡し、らくわけ（ライコケ島）に渡り、夫方もとり（マツワ島）、ちかんこたん（チリンコタン島）、はるをまこたん（ハリムコタン島）三嶋を見渡し、ほろもしり（パラムシル島）に渡り、夫方たんねこたん（オンネコタン島）に渡り、夫方、しやしこたん（シャシコタン島）に渡り、是方搔送りにて、かむしやつけ（カムチャッカ半島）に参り、是方何れも丑に向へ候。れふんちりほい、らくはけ、ほろもしり三嶋は小嶋にて、しもしり、たんねこたんは余程大成る嶋。しやしこたん方地続に而、かむしやつけ方おほつか（オホーツク）に渡り候得ば、順途候得共、時節に寄渡り兼候得共、北端のおほつかに廻り、夫方戌に向へ、亥子に向へ返して、東へ向へ余程参り、是方陸地十日行候得ば、地続にていんでや（インド）に通し、又かむしやつけ方右に廻り、遠く行候へは、ちよふさちこたん（チュクチ半島）に着、此奥あめりか（アメリカ）と申国有之と承候得共、中々往来不能。又あめりか方遠く行き候得は、実に氷海（北極海）にて、其先小嶋続と承り候<sup>20</sup>

とロシア人の理解するところの千島列島やその先の大陸に関する地理情報を得ている。現代の理解からすると、ウルップ島の直近のヤンゲチリポイ島からカムチャッカ半島にわたるまでの島嶼については、正確にはシャシコタン島→オンネコタン島→パラムシル島の順序になる点と、実際の島の大きさからすると大島に該当するだろうパラムシル島の認識が誤っていることが指摘される。また、「しやしこたん方地続」としてカムチャッカ半島を紹介している部分は、もしかすると、それに該当するだろうシムシル島を示す地名を誤記した可能性がある。こうした千島列島より先の地理上の把握としては、カムチャッカ半島よりオホーツク、中国を越えてインドといったアジア世界

18 前掲カラー・スサンネ（2004年）、404頁。

19 『史料集』、521頁。「かつれ」は“飢れ”（うえる）の意。

20 『史料集』、521～522頁。本引用文中における（～島）の部分は、前掲秋月（2014）の“見返し”部分掲載の千島列島地図の呼称表記である。

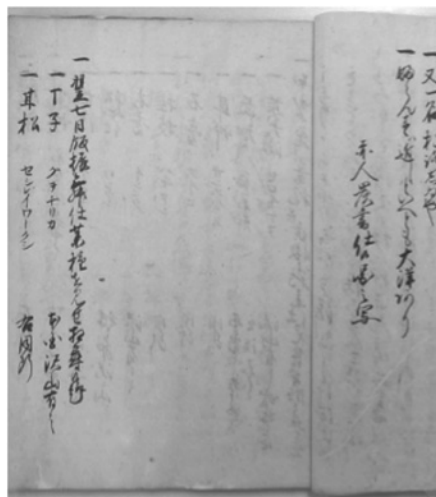
を、またチュクチ半島やアメリカ、さらには北極海の小島にて構成される北方の世界が示されている。これらの描写については、ロシア人たちがもともとラストチキン商会の一員としてのウルフ島に到着していたことから、少なくともカムチャッカ半島からエトロフ島に点在する島嶼や、世界地理についての知識は彼らにとって既存のものであり、当時としてのロシア人達による認識がそのまま徳内に伝えられたといえる。

以上の北方エリアの様相の紹介に続いて、

- 一 いすばにや、いたありや、近国にて、ほとかりや至而近し。
- 一 あむすてもたむは本国へ弥近し
- 一 本国之名は、もすくわ。
- 一 又一名、おろしゐや
- 一 ふらんすは近しといへとも、大洋あり<sup>21</sup>

と記すように、ロシア本国に関する地理事情についても記されており、スペイン・イタリア・ポルトガル・フランスに近く、また、オランダを示唆する「あむすてもたむ（筆者注—アムステルダム）」に特に近い国家として彼らの母国ロシア（「おろしゐや」・「もすくわ」）が紹介され、この情報の記載でもって6日の取材を終えている。情報量からすれば、かなり少量の内容であるが、通訳不在の遣り取りであった点を踏まえると無理もないところである

ここで、重要な点の一つ指摘しておきたい。実のところ、国立公文書館蔵『巡周蝦夷秘談』においては、上記の引用に続いて、「赤人炭書仕候図之写」<sup>22</sup>という記述があり、数行の空白欄のあとに翌7日の取材記が展開されている（[写真1 『巡周蝦夷秘談』]<sup>23</sup>参照）。ということは、この空白部分に何かがあったと推定される場所であるが、それを明瞭化する手掛かりとして、同館所蔵の『別本赤蝦夷風説考』という資料がある。同資料は徳内の取材記の多くを参考にしながら作成した形跡が認められるものであるが、その内容において、



【写真1 『巡周蝦夷秘談』】  
（国立公文書館蔵）

21 『史料集』、522頁。

22 『史料集』、522頁。

23 国立公文書館蔵『巡周蝦夷秘談』（請求番号：178-0253）より筆者撮影。なお、『史料集』の翻刻では、「赤人炭書仕候図の写（後段の地図）」（522頁）として、日本列島やアジア、北方エリアの地図が掲載されているが（524～525頁）、この地図は、『巡周蝦夷秘談』に所収された別の資料『乍恐愚案奉申上候』の文中に収められたものである可能性が高い。

千島列島の島名やロシア近隣の国名を脚注20・21引用文とほぼ同文として記載しながら、それに続いて、

一 赤夷日本国の名をモスクハ又ムスクハ又ヲロシヤ  
又ヲロシキヤといふとなり。爰に赤夷国絵図書せり<sup>24</sup>

とこれまた類似の文言を記し、そのあとに「右之通りに徳内相尋候也終日咄して赤夷帰りぬ」というコメントとともに絵図が掲載されている部分がある（[写真2 『別本赤蝦夷風説考』<sup>25</sup>参照）。この絵図に反映された記載がカムチャッカ半島（「カムサスカ」）・チュクチ半島（「チヨウキチコタン」）・アメリカ（「アメリカ」）・北極海の小島（「小島」）であることを考慮すれば、[写真1]の空白欄に収められていたのは、かなりの確信をもってこの簡易な絵図であり、なおかつ別途に作成された紙葉として添付されていたと考えられる。



【写真2 『別本赤蝦夷風説考』  
(国立公文書館蔵)】

### 第3節 5月7日の記事内容

つづく翌7日の取材記は、主としてロシア人が所持する物品についてを話題とした内容である。それは、「翌七日、飯振舞仕、薬種を見せ相尋候趣き」<sup>26</sup>というように、薬種の話題からはじまっており、「丁字」・「甘松」・「樟<sup>ママ</sup>（筆者注一樟）脳」・「紫檀」・「古浅」・「松やに」・「木香」・「桂枝」・「石膏」・「甘艸」・「益智」・「莫大海」<sup>27</sup>が列記され、さらに詳述すると、「丁字 グラチリカ 本国沢山有之」など、ロシア語の発音や特徴などが補足されている。この紹介に続いて、

本国方免しの書札并手帳等持参仕見せ候に付段々尋候所、赤人申候趣。此の書札所持仕候得は、いすはにや、いたありや、ふらんすや、ほるとかりや、あむすてゐるたむ、あんぬげりや、あらひや、ほりしや、何れへ参候而も本国迄送届申候。別而はくしや近し<sup>28</sup>

と「免しの書札」、現代でいうところのパスポートのようなものを見せ、これを携帯していればスペイン・イタリア・フランス・ポルトガル・オランダ（「あむすてゐるたむ」）、イギリス（「あんぬげ

24 国立公文書館蔵『別本赤蝦夷風説考』（請求番号：185-0289）。『史料集』、505頁。

25 国立公文書館蔵『別本赤蝦夷風説考』（請求番号：185-0289）より筆者撮影。『史料集』、505頁。

26 『史料集』、522頁。

27 『史料集』、522～523頁。

28 『史料集』、523頁。



りや)・アラビア・ポーランド(「ほりしや」)の全てにおいて通行可能であることや、おそらくは「ほりしや」の誤記であると思われるが、ポーランド(「ほくしや」)が近隣国であることが伝えられている。

このパスポートに続いて紹介されたのは、

板行之書物を見せ候。名区にてセスカヤヒヤウヲロラヒヤ

- 一 極 エクワトル 一 球輪 ホールス
- 一 北極 ノルイ 一 象限 ランカルテ
- 一 食図 ウヲスス 一 地<sup>ママ</sup>午 ヲーシユ
- 一 暦 ヘチヤワナ<sup>29</sup>

とあるように、タイトルを「セスカヤヒヤウヲロラヒヤ」とする書物であり、その内容は上記の引用文がすべてである。おそらくは、意思の疎通がままならない交流だったために本の内容を細部にわたり知ることには困難をきたした結果だと思われる。ここで若干の補足を加えるとすれば、同書の書誌についてはいまだ詳細が明らかになっているとは言い難く、先に紹介した『別本赤蝦夷風説考』において記された書名『マチ―スセヒヤウヲコラヒヤ』を念頭に置きながらの「本によって『セスカヤヒヤウヲロラヒヤ』・『マチマスセヒヤウヲコラヒヤ』など。Matematikara Geographia Rossiとでもいうもの」(阿部真琴)<sup>30</sup>、あるいは、『「マチマチセスカヤ・ヒヤウカラヒヤ」マテマテイチェスキイ・ゲオグラフィア。数理地理学といふ」(皆川新作)<sup>31</sup>、『「マチマチセスカヤ・ヒョウコラヒヤ」(天文地理?)というロシア語の書物」(秋月俊幸)<sup>32</sup>とした先学の指摘からもわかるように、著者や成立年は不明瞭である。ただしタイトルの発音から推定される単語の意味や徳内の記述、たとえば「球輪」・「象限」などが航海に必要な測量に関する項目であることを考慮すれば、数学と地理学と天文学を併せた書物の可能性が高く、仮にロシア語の本だったとすれば、発音からМатематика и География Россияといった表現になるのかもしれない。いずれにせよ、この問題は科学史研究の側面からも多角的な分析が今後必要とされるところであり、備忘録として記しておく必要があるだろう。

このような書籍に続いて紹介されたのは、

- 一 算盤を出し、暦元を置き候、千七百八十六。又置候は七万九十四<sup>ママ</sup><sup>33</sup>

29 『史料集』、522～526頁。なお、『史料集』では524～525ページに地図が掲載されているため、筆者による本引用文の出典箇所を表記は誤記ではない。本資料引用において徳内が「地午」と記している部分はおそらくは「地平」の誤記である可能性が高い。

30 阿部真琴「本田明の伝記的研究(三)」『ヒストリア』第13号(1955)、103頁。

31 前掲皆川(1943)、53頁。

32 前掲秋月(2014)、95頁。

とあるように算盤と暦である。ロシア人たちはそれを使いながら「千七百八十六」・「七万九十四」という数字を徳内に伝えているが、前者はその会談時を示す天明6年＝西暦1786年を意味し、後者はおそらくは「七〇二九十四」の誤記であり、仮に7294年という数字を正確なものとし、ピョートル1世により天地創造紀元における7208年12月31日の翌日が1700年1月1日とされた<sup>34</sup>史実を加味したうえで、7208年に86年を加えると7294という数字が算出される。それはすなわち天明6年(1786)を意味していることとなるのである。

この遣り取りを通じて、我々は本多利明と最上徳内の関係をあらためて想起しなければならないだろう。そもそも蝦夷地の測量などの調査は「天文算数の預る所」(『本田氏策論 蝦夷拾遺』)であり、それに資する人材として「天文地利算術に通達する弟子」(『本多利明先生行状記』)である最上徳内の派遣に師匠が尽力したという経緯<sup>35</sup>があった点を踏まえれば、ロシア人に既存の知識の中でも、とくに天文学・暦学についてを積極的に取材しようとした徳内の姿勢は、師である利明の代理を強く意識していたからこそのものであったといえる。

このような提示に続いて最後に提供された情報は、「銅錢有之候間但木綿帋反に付何程交易仕候哉相尋候処、百文位と申候」<sup>36</sup>や「唐墨摺掛(筆者注―“欠け”の意)有之、(中略)何方方交易候哉と相尋候所、陸地通り遠方方交易仕候」<sup>37</sup>というものであり、銅錢や使用途中の墨を紹介されながら、ロシアの貨幣価値や交易の範囲などを簡単に取材している。

以上が7日の会談にて徳内が受容した情報であるが、同日の記録の最後に

悪消長夷当年順風合悪敷、殊に赤人立腹之趣等相聞候に付、うるつふ渡海成兼候由申すに付、ましてか、るりしひ式人えうるつふ渡海急支度致候、差遣候様申付候<sup>38</sup>

という記載が補足されている。この文章は、アツケシ乙名ツキノイから聞いたロシア・アイヌ不仲説や、それによりエトロフ島からウルップ島への渡海が断絶している境遇を回顧しながら、マウテカイノ(「ましてか」)ならびにルリシヒの2人に対してウルップ島への渡海の準備を徳内が要請したという記録である。それまでの内容からすれば唐突とも思える記載であるが、少なくともロシ

33 『史料集』、522頁。

34 土肥恒之氏の「それまでのロシアの暦は天地創造から数えるいわゆるビザンツ暦であり、1699年は7208年、否7208年(略して208年)は1699年に相当した」(『ピョートル大帝とその時代』(中央公論社、1992年)、61頁)ならびに、和田春樹氏の「ピョートルは、7208年12月31日の翌日を1700年1月1日とするとの勅令を出して、天地創造紀元をキリスト教誕生紀元に改め、かつ1月1日を年のはじめとした」(『同『地域からの世界史 第11巻 ロシア・ソ連』(朝日新聞社、1993年)、23頁)による。

35 拙稿「本多利明の北方開発政策論―『蝦夷拾遺』を中心として―」笠谷和比古共著『徳川社会と日本の近代化』(思文閣出版、2015年)、242～244頁。

36 『史料集』、526頁。

37 『史料集』、526頁。

38 『史料集』、526頁。

ア人たちとの交流や彼らからの情報入手を通じながらの徳内の判断はウルップ島への渡海を急務とするというものであり、さらなる具体的な情報の入手を念頭に置きながら、早期の北行を進展させたいといった意欲を具体的な指示に代えたとして理解するのが適宜である。

#### 第4節 5月8日の記事内容

つづいて、対談の最終日となる8日の遣り取りについてみてゆきたい。同日の内容は、ロシア人の今後の処遇に関する問答形式で記されており、徳内・ロシア人双方の思惑が交錯する交渉といった趣である。その内容に入る前に、「翌八日、飯振廻仕、段々相尋度旨種々有之候得共、いまた通辞不参に付、不能之趣申候処、右通辞は通辞候者無之、合点致候迄に而通詞を待にも不及、如此対談仕候、殊之外相分り宜敷と申に付、懸合仕候趣」<sup>39</sup>とあるように、いまだロシア語に堪能なアイヌ通訳が不在であり、意思の伝達に関しては暗中模索であった点を補足しておくべきである。そのような条件下に徳内は、

如何成子細にて此所に到来仕候哉相尋候処<sup>40</sup>

とエトロフ島へと到着した理由を質問する。それに対するロシア人の返答は、

去年、うるつふに罷在候節、拙者共、悪消と申所迄交易之懸合仕度、談合仕候而、当嶋夷人はうしひ方え懸合仕候処、松前侍は首を切候と申に付、皆恐入候。拙者共兩人は、何卒交易仕度、推而相談仕候へは、乗組船中之者共至而止め候に付、うるつふ夷之船に逃参候と申候<sup>41</sup>

というものであり、ウルップ島までの南進時に交易交渉を主眼とするアツケシ訪問を計画し、エトロフ島のハウシビ（のちにロシア人たちを監督下に置くこととなる）を通じてその要望を松前藩に打診したところ、同藩は「首を切候」と拒絶し、その意向を聞いたロシア人たちのほとんどはウルップ島アイヌの船に乗り本国へ逃走してしまったこと、結果として交易交渉の継続を希望する3人のロシア人たちは取り残されてしまったことを伝えている。この内容は5月5日の記載の直前に記された、天明5年（1785）の段階にて入手したロシアとアイヌの不穏な関係についての情報に基づいた徳内の疑問を解消する返答として理解できる。

こうした正誤確認に続いて、ロシア人達の今後に関わる問答へと切り替わる。まずは、

此度、拙者同道にて、うるつふえ相渡候而も如何と相尋ね候<sup>42</sup>

39 『史料集』、526頁。

40 『史料集』、526頁。

41 『史料集』、526頁。

42 『史料集』、526頁。

と徳内との同道によるウルップ島への帰還が提案される。これは前日7日の記事にあるように、早急な同島への北進を希望する徳内の含意であるともいえる。それに対する彼らの返答は、

是方相戻り候而は、かむしやつけ役人え参候節、皆々之相談を省け他国え行候と、咎メを受可申と大に愁色仕候<sup>43</sup>

というものであり、ウルップ島を経由しさらに北進すれば、いずれはカムチャッカ半島へと達することになり、その時に同半島の役人から離脱を対象とした処罰を下されてしまう可能性を伝えている。それを踏まえながらの次の問いかけは、

拙者同道にて、日本え参り候而は如何と相尋候<sup>44</sup>

というように、南進して日本へ向かうのはどうかという提案であり、それに対するロシア人達の反応は、

我人共に殊之外に悦ひ黙礼仕候。本国え罷帰、右之段申聞候はゞ、難有可申受候由申候<sup>45</sup>

と、将来的なロシア本国帰国時に日本を訪問したという事実が自分たちの保身につながるだろうと好意的なものであった。それにつづいて、

日本には、いすばにや、ふらんすや辺之通船致候間、通辞有之と申候得ば<sup>46</sup>

と、日本にはスペインやフランス近国であるオランダ船の到来があり、オランダ語通訳も存在するといった徳内の助言に対して、彼らは、

大に悦ひ、いすは<sup>ママ</sup>たや、ふらんすや、皆同国にて諸侯有之候間、所持之書札を差出し候は、早速国元迄罷帰候事心易と申候<sup>47</sup>

と回答し、5月7日に話題となったヨーロッパ諸国内の往来を許可する通行証を念頭におきながら、ロシア本国への帰還が可能となるとの見通しを示している。以上の徳内と3人のロシア人たちの遣

---

43 『史料集』、526～527頁。

44 『史料集』、527頁。

45 『史料集』、527頁。

46 『史料集』、527頁。

47 『史料集』、527頁。

り取りが帰結するところは連れ立って日本へ向かうという方向性であるが、それについて徳内は

拙者同道に而日本え参候はゞ、追而うるつふえかむさすか人参候節、如何有之候哉相尋候所<sup>48</sup>

と同伴による日本への南進の過程で、カムチャッカの役人の指示下に3人を探索する人々がウルツプ島に派遣されたらどうなるだろうかと懸念も示している。それについてのロシア人たちの返答は、

日本え参候節は壱人は当所に残し置、かむさすか、おほつか諸役人え書札を遣し候へば、一度相談に背き参候而も、交易懸合に付日本へ参り候趣申聞候はゞ、殊之外首尾好候と申候<sup>49</sup>

というように、カムチャッカならびにオホーツクの役人に向けた手紙を携帯させた3人のうちの1人をエトロフ島へ残しておけば、業務上の離脱行為という背任が事実としてあったとしても、交易交渉を進展させるための日本訪問という実績があれば自分たちの立場も許容されとの見通しを示している。それとの関連下に、

然はかむしやつけの方へ、此度交易可仕候間、急き悪消息参着可仕旨可申遣と申候得は<sup>50</sup>

と、交易交渉を目的としたアツケシへの出発を急ぐことをカムチャッカ役人へ伝達してはどうかといった徳内の提案に対して、3人のロシア人の反応は、

猶々悦び、依之天気次第出帆可致旨申候得は、大に進之旨、かむさすか、おほつか本国迄之書札相認可申由。札を致し帰り申候<sup>51</sup>

というように歓喜へと至り、カムチャッカ・オホーツク役人のみならず本国にまでの伝達を期待する文書を作成するために、札を述べて対談の席から離れていったことが記録されている。

以上が8日の徳内とロシア人の対談内容であるが、『乍恐以書付奉申上候』におけるロシア人についての取材記録はここでもって終りを告げる。この遣り取りの特質を史的価値に注目しながら指摘すれば、初めてエトロフ島にわたった日本人である最上徳内とロシア人による初めての日・ロの交流が描写されている点、意思の疎通の面においてアイヌの介在がなければ成立しない条件下に置かれていた点、ロシア人から日本人へと初めて伝えられた情報として、北方エリアの島々の名やその先の地域や国名、薬種、銅銭、墨、算盤といった諸道具、また、ロシアの通行証とその機能、天

48 『史料集』、527頁。

49 『史料集』、527頁。

50 『史料集』、527頁。

51 『史料集』、527頁。



文地理の書物の内容やロシアにおける西暦のこと、問答には徳内側・ロシア人側それぞれの要望が含意としてある点、をそれぞれ挙げることができる。また、エトロフ島へのロシア人到着の理由など、徳内の疑問が解消されてゆく過程が時間的経緯を背景として記されているところは資料的に興味深い構成であるという。

このような特徴が散見される5月5日以前も含めての8日までの日・ロ交流の過程は、北方エリアやロシア人についての正確な情報を求めて北行を進展させたい徳内の事情と、北進による帰国案を受容せずに<sup>52</sup>交流交渉のための日本訪問を希望するロシア人側の事情、そして、なによりも交流の場の設定や意思の疎通の局面において、双方を媒介するアイヌの存在により成立したものであり、換言すれば徳川日本・ロシア・アイヌそれぞれの立場が混在した意義深い史的瞬間であったといえる。

### 第5節 会談終了後の展開

最後に、8日の対談終了後の展開についても触れていきたい。それはロシア人たちが礼を述べて立ち去ったという描写の直後に記されている部分であり、

ろりしひ罷出、うるつふ渡海之義被仰付候所、如此風厳數年は六ヶ敷候間、早速宜き船も無之、亦獵船は作立候得は有之候得共、荷物積入候事不相成候。何分御延引被下度旨申立候<sup>53</sup>

という記述である。ここでは、ルリシヒ（「ろりひし」）が言うところの、強風のためウルップ島への渡海は困難であり延期すべきとした提案が記され、その理由として適した船の不在や、ラッコ猟用の船の製作は可能であるが荷物を積載することができないことが挙げられている。この提言がなされた時間については、ロシア人が立ち去った直後かそれともある程度の時間を置いてからののか不明であるが、いずれにしてもこの提案は前日7日の時点で徳内がマイテカアイノならびにルリシヒにウルップ島への渡海準備を要請していたことを受けてのものであったといえる。そもそも、8日の時点で徳内はロシア人を連行しながらの日本への帰還を方針とすることとしたはずであるが、もしかするとロシア人を帯同しながら一度はウルップ島へとわたり、その後は同伴しながらエトロフ島・クナシリ島・アツケシを経由して日本へ、というプランを描いていたのかもしれない。そう

52 岩下哲典氏は、平川新監修『ロシア史料にみる18～19世紀の日露関係』第2集（東北大学東北アジア研究センター叢書第26号、2007年）を活用しながら、「ロシア政府は、臣民となった千島列島南部住民のアイヌ民族からは毛皮税を徴収してはならないと布告している。その理由は、①住民を管理する者が私腹を肥やすから、②保護のための軍隊の維持費が膨大で日本の攻撃に耐えられないからとされる。つまり、国境付近での性急なロシア化は日本との関係上不利益となるとしたのである。ロシアが、対日関係を重視していたことの証拠とされる」（岩下哲典「一八世紀～一九世紀初頭における露・英の接近と近世日本の変容」笠谷和比古編『一八世紀日本の文化状況と国際環境』（思文閣、2011年）、514頁）と述べている。この指摘を考慮すれば、ロシア人が北進による帰国を断念せざるを得なかった事情として、本国の統制を恐れる商人としての立場も関係しているかもしれない。

53 『史料集』、527頁。

考えると、唐突ともいえるルリシヒの意見がここに記された意味が浮き彫りになってくる。

ここで一つ明確なことは、ウルップ島への目下の渡航を躊躇せざるを得ない状況が発生したという事実であり、それを考慮しながら徳内は次のように記している。

山口鉄五郎様、跡方御出被成候処、拙者ゑとろふえ渡り候後十日余、宜き天気も不相見。惣而風順悪く、早速御出之様子も不相知。夷人に相尋候所、此順風に而は御出有間敷杯と申承により、うるつふえ渡海戻り候事も有之。又ゑとろふ迄渡り兼、罷帰候年も有之候間、難斗と申(中略)赤人を連れ参候節、乍恐思召に依て、うるつふえ追戻し候事も有之哉、難斗此様之節、時節に相遅り如何有之候哉<sup>54</sup>

これは、先渡である最上徳内を後追いしている上司の普請役山口鉄五郎の到着を念頭に置きながらその後の対応を模索した内容であり、徳内自身がエトロフ島へ到着してから天候不順もあって山口の到着がいつになるか予測がつかないこと、アイヌに意見を求めたところ、ウルップ島への北進計画が山口ら上司の判断により根底から中止になった可能性や、予定通りの北行を進めながらもエトロフ島にはまだ到着していないといった可能性が示されたこと、そして、やはりロシア人たちをウルップ島へと帰還させたほうが良いのかどうかなどの迷いが述べられ、山口の遅れに対する困惑が描写されている。したがってこの記載に続く『乍恐以書付奉申付候』最後の一文、

拙者不肖之義候へは、自分了簡を以取斗難致、何分急き候はゞ可然と奉存、赤人連れ参、御注進可申上様に仕候<sup>55</sup>

はそれを解決するための今後の活動予定の報告であり、徳内の独断では判断できない状況だからこそ山口には北進を急いでもらいたいといった要望を加えながら、自身は今後の方針を確認するべく、早期の合流のためにロシア人を同伴のうえ山口の向かっている方面へと行動させてもらうといった内容となっている。

以上がエトロフ島における徳内の取材記であるが、それを内容とする注進書を作成したということは、逐一記録し続けたものを上司である山口に伝えるために書簡の体裁にてアイヌに携帯させ、自身の移動に先んずる形で派遣したものなのかもしれない。このような仮説を加味すれば、徳内自筆の記録資料がどこかに残されている可能性もある。いずれにせよ、山口との合流が果たされる5月13日以前に成立したこの『乍恐以書付奉申付候』は、調査隊の動向やロシア人ならびにアイヌからもたらされた情報、さらには交流の経緯を時系列として記録しているところから、北方史を構成する要素としての史的価値があることは確実である。

54 『史料集』、527～528頁。

55 『史料集』、528頁。

## おわりに

最後に、本稿に与えられた課題、すなわち『乍恐以書付奉申上候』に記されるところの、最上徳内とロシア人の会談内容、その後の展開を内包した備忘録についての検討結果を簡潔にまとめながらその史的意義を指摘したい。

分析対象となった部分により抽出しうる史実は、天明6年(1786)5月5日～8日における3人のロシア人(イシユヨ、サスノスコイ、ニケタ)との対談は質の高い通訳が不在のままモシリハのシュルシャムで行われ、徳内自身は天文地理の専門家であった師利明の代理を強く意識した姿勢でもって臨んだこと、対談内容としてはロシア人のエトロフ島到着の経緯、あるいは北方エリアの各所の地名やその所在、ロシアを含むヨーロッパ世界の国名といった地理情報、薬種・銅銭・墨・通行証・天文地理書『セスカヤヒヤウラロヒヤ』・算盤といったロシア人携帯の品々が徳内に提示され、とくに算盤の話題時にはロシアの西暦の理解が伝えられている。こうしたロシア側からの紹介とは別途に3人のロシア人の母国帰還をテーマとした問答も行っており、北方エリアの情報を求めてさらなる北進を希望する徳内・交流交渉を視野にいたれた日本訪問のための南進を希望するロシア人・双方を媒介するアイヌといった、換言すれば徳川日本・ロシア・アイヌそれぞれの意向が混在した空間にて交流が成立していたことが確認された。なお、国立公文書館蔵の同資料から剥落していた簡易な絵図の再現化が本研究によってはけられたことも強調しておきたい。

こうした理解に付言すべきものとして、この徳内の記録が「天明5・6年(1785・86)の幕府最初の蝦夷地調査には徳内も加わり、雇身分ながらエトロフ島・ウルップ島を見分し、ウルップ島ではロシア人にも会って多くの情報を聞き取り、その成果は、御普請役佐藤玄六郎などが著した報告書『蝦夷拾遺』にも反映された」<sup>56</sup>と指摘されるように、蝦夷地調査隊首班により作成された『蝦夷拾遺』や、後日に成立することとなる徳内自身の著作『蝦夷草紙』(寛政2年(1790)9月成立)、あるいは、遡ること同年2月において同書を整理したものに同3年(1791)1月付の本多利明の「序」が寄せられた『蝦夷国風俗人情之沙汰』<sup>58</sup>などへと反映され、幕府の蝦夷地政策の進捗<sup>59</sup>に大きな影響を与えていった形跡がある点についても強調しておくべきであろう<sup>60</sup>。また、北方事情についての情報が流布を通じて知識人や民間人<sup>61</sup>などさまざまな人々の受容するところとなり<sup>62</sup>、例えば、徳内の師本多利明の経済政策論説の嚆矢に該当する『自然治道之弁』(寛政7年(1795)成

56 川上淳『近世後期の奥蝦夷地史と日露関係』(北海道出版企画センター、2011年)、162頁。なお、蝦夷地調査の報告書は皆川・佐藤・庵原・山口・青島により『蝦夷拾遺』として整理されており、後世に写本として流布した形跡が認められる。同書については大友喜作『北門叢書 第1冊』(北光書房、1943年)に翻刻化されている。

57 秋月俊幸氏は「最上徳内がイジュヨから聞いたロシア事情の内容を記した写本には、『蝦夷拾遺』『蝦夷草紙』『蝦夷草紙後編』『魯西亞国紀聞』『赤人問答書』『徳内私記』『別本赤蝦夷風説考』『千島秘説』『赤夷聞書』『魯西亞聞略』『赤人イジュヨ聞書』『蝦夷地一件』『辺要分界図考』『北辺探事補遺』『蝦夷廻見日記』などがあり、当時の日本人がいかにイジュヨのロシア情報に関心をもっていたか示している」(前掲秋月(2014)、95～96頁)との見解を寄せている。

立)に、

余が門人何某なる者寛政壬子年五月（筆者注一本多利明による誤記）、厳命に因て渡海の節、彼吏と思しき二人に対面して、何ゆへ渡来せしと尋問すれば其答に曰く、モスコヒヤの官人なりしか、東洋魯西亞の諸嶋へ渡海の節、洋中に於て難風に遇ひ、此地に漂着せり。只庶幾はに本へ伴ひくれ給へ、長崎に和蘭毎度渡来すれば其船に便船して我国へ帰れば大に便利なりとて

- 58 『蝦夷国風俗人情之沙汰』は『日本庶民生活史料集成 第4巻 探検・紀行・地誌（北辺篇）』（三一書房、1969年）に翻刻化されている。
- 59 岩崎奈緒子氏は「天明の蝦夷地見分の結果、ロシアの南下の具体的な様子とともに、請負商人を介在させた松前藩の蝦夷地経営の実態が幕府に伝えられるところとなった。見分自体は田沼が失脚したために頓挫するが、これ以降、寛政11年（1799）の蝦夷地幕領化に至るまでの対蝦夷地政策は、この見分で得られた知識を基礎に立案されていくことになる」（岩崎奈緒子『日本近世のアイヌ社会』（校倉書房、1998年）、206頁）と指摘している。
- 60 徳内のプラットホームとしての意義について、川上淳氏は「徳内は重蔵（筆者注一近藤重蔵（1771-1829））の考え方に影響を与えただけでなく、幕閣の信頼も厚く、直接蝦夷地政策に影響を与えたと考えられる。さらに、彼の師である本多利明の蝦夷地に対する考え方も、徳内や幕閣に影響を与えたことは間違いない」（前掲川上（2011）、151頁）と指摘している。
- 61 たとえば、蝦夷地の場所請負商人の四代目飛弾屋久兵衛である益郷（1765-1822）が編さんしたとみられる『異舶航来漂流民帰朝紀事』には、「天明五巳年に至り、江戸表従り奥蝦夷地島々の検分の為め、御普請役佐藤玄六郎、山口鉄五郎、庵原弥六、青嶋俊蔵、皆川沖右衛門差遣はされ候処、翌天明六午年早春、松前福山出立、下役最上徳内を以てエトロブ島え差立て候」といった文言が記載される『天明元辛丑年より寛政四壬子年まで、東西奥蝦夷地島々え魯西亞人渡来の記』（『異舶航来漂流民帰朝紀事』山下恒夫編『江戸漂流記総集別巻 大黒屋光太夫史料集』第二巻（日本評論社、2003年）、79～85頁）が収められている。これは、徳内の書簡『乍恐以書付奉申上候』の内容を参考にしたとみられ、同じく『異舶航来漂流民帰朝紀事』に所収された『ヲロシア国の大概』（同書、101～114頁）には「蛮書マチへヒスカヤヘウ、同ゼヲガラレ」（同書、106頁）の名や、「最上徳内エイシユヨが直話也。是れ最上と六十日余同居せるにより、風と話さる様子なり」（同書、114頁）などの記載が見える（備忘録として付言すると、この資料に「東都ノ処士、天学家本多三郎右衛門利明新製、霊台儀象志ニ因リテ、ロセイヤノ地径緯ヲ考フ。里数ヲ記置キタル所、左ノ如シ。和蘭書シカットカーメル」（同書、111頁）という記載も見える）。現地商人の情報収集能力の検証といった面からしても、興味深い資料であるが、徳内が受容するところの情報が流布したケースの分析に資することは間違いない。
- 62 菊池勇夫氏は「18世紀後半以降のロシアの蝦夷地接近という外圧の深化は、北方探検などによる情報量の拡大を促し、海防や蝦夷地開拓に関する議論を隆盛にさせていく。それとともに蝦夷地観自体も現実的になって異国視から内国視へと大きく変容を遂げ、その最先端にあったのは本多利明とその門人最上徳内の属国（島）開業論であったといえよう」（同『幕藩体制と蝦夷地』（雄山閣、1984年）、7頁）との見解を示している。
- 63 本多利明著『自然治道之弁』29丁表～裏（北海道立文書館蔵 登録番号 旧記1610（マイクロフィルム請求記号 旧記F2-1081））・『本多利明集』（誠文堂新光社、1935年）261～262頁。なお、利明の誤解、あるいは誤記や修正については、徳内取材時の天明5・6年（1785・86）から『自然治道之弁』成立の寛政7年（1795）にいたる迄、およそ10年間の時間が経過しているところから、記載上の変化をうながす熟慮があった可能性や、あるいはケアレミスなども考えられる。こうした変化をうながした要因についても検討を加えるべきであろう。

強て願たりといへり<sup>63</sup>

という記載があるように、あきらかに徳内の取材記が活用され、さらにはこうした情報に基づきながら北方開発経済政策が論じられているところに鑑みると、徳内の実体験に基づく取材記の影響力の大きさは日本経済思想史の展開においても波及していることを格別に強調すべきであるといえよう<sup>64</sup>。

---

64 本稿は本多利明の経済政策思想研究のさらなる深化を意図するものであるが、北方史と利明の関係性をさらに明らかにすることが直近の課題である。その際、最上徳内と本多利明にみられる開発経済論の系譜、あるいは最上徳内の経済思想などについても明らかになるかもしれない。さらには、これらにその他の人物による成果や幕府の意向などについての分析も包括したうえでの北方開発型経済思想史という分野が確立されるかもしれない。以上の見通しは、並河天民・坂倉源次郎・平沢元愷・工藤平助・土山宗次郎・平秩東作・林子平・古河古松軒・菅江真澄・新山質・大原左金吾・平賀源内・本多利明・最上徳内に関心を寄せた中井信彦氏の論説〈同「蝦夷研究と蝦夷地開拓—日本民族学の東雲—」『史学』第21巻第3・4号（三田史学会、1943年）〉に触発されたものであることを末尾として記しておく。